

◇いんたびゅー 竹内 誠

「幕末の外国人が受けた第一印象は横浜の農漁村の暮らしぶりだった」

◇企画展「幕末動乱を生きた武士」によせて

◇＜研究余話＞ 近世の市場神代里神楽

◇ 収集・収蔵資料の紹介[21] 複製資料・「諸岡五十戸」木簡

◇＜常設展示室探検＞ 中世の将棋駒

◇おかげさまで10周年 これからもよろしく ―「博物館まつり」報告―

◇くちよいとミュージアムショップたいむ＞ 新商品紹介「オリジナルトートバッグ」

◇＜知ってますか?＞ 愛称決定!「歴博通り」

横浜市 歴史博物館 NEWS 20 2005・3



竹内 誠

(たけうち・まこと)

東京都江戸東京博物館館長、東京学芸大学名誉教授

幕末の外国人が受けた 第一印象は 横浜の農漁村の 暮らしぶりだった



◎江戸文化にはどんな魅力がありますか。

江戸時代の文化を特色づけることとして、二三〇年間続いた平和、ということがあります。封建社会によるひずみもありましたが、平和が大きく全体を覆っていた。だから庶民は、どんな苦労があっても、生きがいや誇りをもって、暮らしていたのでしょう。平和が一番大切だ、ということ江戸時代が示しているように思います。その文化がどのように優れていたのかは、幕末に日本を訪れた外国人の、旅行記などからも分かります。つまり外部評価です。彼らは、観光や仕事で来て、日本の表面しか見ていませんし、偏見や誇張もあるとはいえ、世界を旅していますから、欧米の自国やインド、中国などと比較することで、真をうがった部分もあるといえます。

畳の文化を見て驚く

◎具体的にどのようなことが評価されていますか。

例えば、有名なドイツ人考古学者シュ

リーマンの『旅行記』には「平和、行き渡った満足感、豊かさ、完璧な秩序、よく耕された土地が見られる」とあり、デ・マーク生まれのフランス海軍士官スエ・ンソンは『江戸幕末滞在記』で「美しい国日本、陽気で親切な住民」と書いています。また、家々の庭に四季折々の花が植えられたりして「自然との共生」をしていたり、畳の文化により、豪華なベッドやソファなどを使わないで、快適なシンブルライフを送っていること、錦絵や根付けなどの工芸品に見られる優れた技術と美的センス、さらには教育が普及して、女性も男性同様に文字が読めることなどに驚いています。

神奈川宿は重要な拠点

◎江戸文化は横浜にはどんな影響をもたらしたのでしょうか。

そもそも、これらの旅行記に書いてあるのは主に、横浜の印象だといえます。当時の外国人は横浜港に上陸し、まず横浜を見てから江戸やほかのところを回りました。横浜といっても、開港で整備さ

れ、各地から来た商人がしのぎを削っていた地域ではなく、その周辺の地域、神奈川宿や、以前からある農村や漁村の人々の暮らしぶりが、外国から来た人たちに一番強い印象を与えたのです。つまり当時は、この地域の人々が日本の「顔」であり、ヨーロッパ人と比べて決して劣るものではない、という印象をもたらし、というのが私の考えです。そういう観点からもう一度、横浜を見直してもらいたい、と思います。

◎江戸文化にとって、現在の横浜地域はどういう役割をもっていたのですか。

江戸に幕府が開かれた当初は、豊臣氏のいる大坂など、西に対する警戒が必要でしたから、この辺りは軍事的な役割が大きかったと思います。その後、江戸の経済を支える地域、という意味合いが濃くなりました。また、東海道が、参勤交代の人数などから見て、非常に重要な街道でしたから、神奈川宿は、異文化交流の拠点として、また西からの情報などをいち早くキャッチする、という意味でも大きな意味を持っていた、といえます。

市民とともにつくる

◎江戸東京博物館（江戸博）館長や日本博物館協会副会長として、今後の歴史系博物館のあり方をどう考えますか。

大事なことは「開かれた博物館」ということです。開かれる、とは市民に対して。ですから、市民とともにつくる博物館が、これからのあり方だろうと思います。江戸博の場合、さらに三つのことを目指しています。一つは地域に開かれる、

ということ。それで重要になるのは、まずボランティアです。博物館で学習して人間性を豊かにしたい、その代わりにボランティアを、というような気持ちの方に博物館がこたえる、という双方の連携を心がけています。二つ目は学校に開かれる、三つ目は世界に。これらは結局、誰にも優しい博物館、ということなんです。高齢者や障害のある方のためにバリアフリーにする、とか、外国の方のために、展示に、英語や中国語やハンゲル、そのほかの外国語による説明を添える、というようなことが考えられます。それから、展示も大事ですが、付加価値、つまりミュージアム・ショップやレストランも大事です。それらの整備や充実にも力を入れるべきでしょう。

◎当館への期待は。

江戸博が目指すものは、どこの博物館にもいえることではなくても、横浜の歴史博とは一致するのでは、と思います。江戸博の場合、首都東京にある関係で、海外からのお客さんにとって、首都の顔であると同時に日本の顔である、という意識をもって、世界に開かれた博物館を目指しています。横浜も、幕末の伝統からいえば、世界を意識した博物館づくりをしてもよいのでは、と思います。

たけうち・まことプロフィール

●一九三三年、東京・人形町生まれ。東京教育大学大学院文学研究科博士課程修了。東京学芸大学教育学部教授、立正大学文学部史学科教授を経て現職。江戸東京博物館には開館準備段階からかわる。専門は江戸文化史、近世都市史。徳川林政史研究所所長、日本博物館協会副会長。

●著書 『江戸と大坂』（小学館）『江戸名所図屏風の世界』（岩波書店）『教養の日本史』（東京大学出版会）『江戸の盛り場・考』（教育出版）ほか多数。

企画展 幕末動乱を生きた武士

——武州金沢藩士・
萩原唯右衛門則嘉の生涯——

によせて

江戸幕府の所在地江戸の近郊地帯という地域性をもつ横浜市域には、幕府領(天領)や旗本領が多く配置され、代官や江戸に居住する旗本たちの支配下に置かれていました。こうした中、享保七年(一七三二)に

それまで下野国都賀郡皆川(栃木県栃木市)にあった陣屋を武蔵国久良岐郡金沢(金沢区)に移転し、明治維新にいたるまで存続した武州金沢藩(二万二千石、藩主米倉家は、市域を本拠とする唯一の大名として、きわめて特異な存在ということができま

す。しかし、その実態については、藩政に関わるまとまった資料群が確認されていなかったため、不明な事柄が多いように思われます。

こうした中、武州金沢藩の上級家臣であった萩原家に伝来した萩原文書(萩原義則氏寄贈、当館所蔵)には、天保二年(一八三二)から明治七年(一八七四)まで同家の当主であった唯右衛門則嘉の動向に関わる資料が数多く残されているとともに、明治四年(一八七二)の六浦藩(明治二年

といえます。萩原文書の内容については、すでに収蔵資料展「ペリー来航150周年記念 ペリー来航と東京湾」(会期：平成一五年七月一九日～九月三三日)や同「開国150周年記念 武州金沢藩と黒船来航」(会期：平成一六年五月二九日～六月二七日)においてその一部を紹介してきましたが、今回の企画展では、萩原則嘉の生涯を追うことにより、幕末動乱期の武州金沢藩とその藩士たちの動向をみていきます。

萩原唯右衛門則嘉は、文化二年(一八一五)に代々武州金沢藩士であった萩原家に生まれ、天保二年(一八三二)に父双左衛門の隠居により家督を相続します。その後、順調に昇進していき、天保二年(一八四二)には江戸上屋敷の長屋を与えられ、「御台所目付」「御作事・大納戸」などの役職を兼任します。ところが、翌三年(一八四三)には詳細な事情は不明ですが、上記の役職を解任され、金沢陣屋へ引越すことになりました。これ以降、萩原家は金沢陣屋の長屋で居住することになります。

金沢陣屋における則嘉は、弘化三年(一八四六)のビットル艦隊の浦賀来航に伴う浦賀への派兵、嘉永六年(一八五三)・同

七年(安政元年(一八五四))のペリー来航における乙艦の警備などに際して、江戸藩邸や浦賀奉行所との連絡・情報収集等において活躍します(この点については『武州金沢藩(六浦藩) 関係史料集2』解説参照)。こうした点が評価され、安政四年(一八五八)には、それまで金沢陣屋で勤めていた「勘定方」などの役職を免じられ、江戸上屋敷での「御取次方」に任命されているように、則嘉の役職は再度昇進していくこととなります。

文久三年(一八六三)以降、藩主米倉昌言は、大番頭として大坂城に滞在しています。則嘉はそれに従い大坂に滞在、元治二年(慶応元年(一八六五))に「御進発」(第二次長州出兵)へ藩主昌言が参加するとその随行を命じられます。慶応三年(一八六七)に横須賀製鉄所の警備を武州金沢藩が命じられると、その「頭取」に任命され、たびたび横須賀へ赴いています。その後も幕府の瓦解・明治政府の成立といった変化の中で役職を歴任しますが、明治四年(一八七二)の藩制廃止に伴う変化が一段落したと思われる明治七年(一八七四)に病気を理由に隠居しています。

こうした萩原則嘉の生涯を通して、従来あまり省みられることのなかった、幕末動乱の変革期に生きた横浜の武士のあり方をうかがうことができたいと思います。

会期 四月九日(土)～五月二五日(日)

(斉藤 司)

米倉丹後守

印鑑



米倉丹後守の印鑑「武州金沢藩印」

「二八六九」に武州金沢藩より改称の廃止時に萩原家へ移管された若干の藩庁文書も含まれており、一九世紀の武州金沢藩を知る上できわめて貴重な文書群である

近世の市場神代里神楽

いちばじんだいさとかがぐら

一、市場神代里神楽と萩原家文書

横浜市域には、神代神楽という、（じんだいしんがく） 記紀神話を仮面劇で演ずる神楽が伝承されています。横浜の神代神楽の家元は、ほとんどが宮司などの神職をつとめる方です。神楽は、その家元を元締とした社中が演じます。社中は、さまざまな神社や氏子たちから依頼を受けて、随時その神社に向いて神楽を奉納しました。

横浜の神代神楽の一つ、市場神代里神楽



写真1 文政二年 御神楽最華勤人数帳

（以下、市場神楽と称す）は、鶴見区市場東中町の熊野神社、同区矢向の日枝神社の萩原社中に伝承されてきた神楽です。

その市場神楽の近世、近代の姿を伝える資料が、市場熊野神社に伝来する市場村萩原文書

です。萩原文書は、元禄期から昭和期まで、約四三〇点が当館に寄託されていますが、中でも今回は、神楽奉納の日程や場所を記した近世の資料に注目したいと思います。

この資料は、「御神事控帳」（ごしんじくわう）、「御神用控帳」（ごしんようくわう）などの題がつけられていますが、今回は最も多く使われている「御神用控帳」の名称で統一します。「御神用控帳」は、文政二年（一八一九）から天保一五年（弘化元、一八四四）の二五年間にわたって、年ごとに一冊ずつ、ほぼ毎年残されており、この時期の市場神楽奉納の実態を知ることのできる優れた素材なのです。

二、「御神用控帳」からみえるもの

それでは、「御神用控帳」には、具体的にどのようなことが記されているのかを、文政二年の資料を用いてみていきましょう。写真1は、資料の一月の部分です。積文は次のようになります。

朔日

一、金百正
同式朱鶴亀代
銭壹貫八百文花

おとめ 隼人 仲良 米蔵 太兵衛 日向 六人

二日

一、銭貳貫貳百文
同四百文穴

馬場 寺尾村
荏田 おとよ 数馬 隼人 秀五郎 政吉 吉蔵 日向 川崎男 本郷村

同日

一、同式貫文
同五百文

おとめ 仲良 米蔵 八五郎 大和 徳兵衛 太兵衛 羽田村

「御神用控帳」には、この形式で一月一二月の神楽奉納が記録されています。まず日にちと神楽を演じた神楽師達の名前がならびます。「荷」とあるのは、装束や面などの運送を担当した人物です。荷物は葛籠に入れら

れ、大八車などで運んでいました。運送担当のうち徳兵衛、太兵衛は社中の者ですが、「川崎男」は、川崎宿の人足を雇ったものと推測できます。そして名前のあとに合計の人数が示され、最後に奉納が行われた村名が記されます。合計人数は現在の市場神楽奉納時の人数と大体一致しており、舞方、囃方など神楽の人員構成が、近世以来変わらず伝えられているといえます。

名前の上の金額は、右が神楽奉納に対する報酬、左が観客からのご祝儀です。朔日の「花」とは花代で、まさしく神楽をみた客からのご祝儀を意味します。「鶴亀代」は、元旦というこで出た特別なご祝儀と思われる。二日の花代の「穴」は、銭形平次が提げ



写真2 市場神代里神楽「天之返矢（あめのかえしや）」

ているような、穴あき銭を九六枚ずつサシ（銭をくくる紐など）に通して百文と数える、いわゆる九六銭で受け取ったことからきていると考え



- | | |
|------------|-------------|
| 1 下野毛村(1) | 19 塚越村(1) |
| 2 尾山村(1) | 20 川崎宿(2) |
| 3 上蛇窪村(1) | 21 大師河原村(3) |
| 4 馬込村(3) | 22 矢向村(1) |
| 5 小田中村(1) | 23 小田村(1) |
| 6 野川村(1) | 24 大島村(1) |
| 7 清沢村(1) | 25 潮田村(2) |
| 8 子母口村(1) | 26 末吉村(1) |
| 9 明津村(1) | 27 網島村(1) |
| 10 木月村(2) | 28 駒岡村(1) |
| 11 市ノ坪村(1) | 29 北寺尾村(1) |
| 12 加瀬村(1) | 30 馬場村(1) |
| 13 下丸子村(1) | 31 新羽村(2) |
| 14 矢口村(2) | 32 本郷村(1) |
| 15 大森村(6) | 33 岸ノ根村(1) |
| 16 八幡塚村(2) | 34 荏田村 |
| 17 羽田村(4) | 35 新井宿村 |
| 18 小倉村(1) | |
- ※ ()内は神楽を奉納した回数

図 文政二年の市場神代里神楽奉納範囲

えられます。花代の額をみると、どの村でも百文単位で、決して少ない額ではありません。ここから、正規の報酬だけでなく、花代も社中の重要な収入源になっていることが読みとれます。

以上が釈文の内容ですが、ここで注意したい点があります。それは二日に出てくる「荏田 おとよ」です。荏田(青葉区)には萩原社中とは異なる神代神楽の社中があり、おとよはその社中の神楽師だと考えられます。さらに、二日は二手に分かれて神楽を奉納しているの、おとよは人員補充のため応援として参加した神楽師であると考えられます。このおとよの事例からは、人手が必要などきなどに、応援の神楽師を派遣したりされたりする元締同士の相互のネットワークの存在がみえてくるのです。

以上、「御神用控帳」の一部を詳しく見てきましたが、シンブルな記述の中に多くの

情報がつまった資料であることがおわかりいただけたかと思えます。次項では、その情報の中でも特に奉納先の村名に着目し、神楽の奉納の範囲について考えてみたいと思います。

三、神楽の奉納範囲

はじめに、図をご覧ください。この図は「御神用控帳」から文政二年の奉納先の村をピックアップし、地図に表したものです。では、ここからは何が読みとれるのでしょうか。

地図で目を引くのは、やはり奉納村数の多さと範囲の広さでしょう。奉納村数は三三か村、奉納回数は五一回にも及びます。大森村や羽田村で奉納回数が多いのは、村が大きく字が多いため、字の鎮守の祭礼のたぐいに出向いているからだと考えられます。奉納範囲は多摩川を挟んでいたい円形に広がり、北端は下野毛村や馬込村、南端は馬場村、東端は羽田村、西端は小机村となります。現在の横浜市区域にとどまらず、川崎市や東京都の大田区、世田谷区、品川区にまで広がる大きな円です。

元締は、その社中が神楽奉納を請け負う領域、いわば一種の縄張を持っていたといえます。つまり、この地図に円形に広がる範囲こそが、萩原社中が受け持つ領域だったのです。次に、この円の広がり方に着目してみましよう。普通に考えると、円の中心に、市場神楽の本拠たる市場村があるはずなのですが、実際は、市場村は円の南端近くに位置しています。円は横浜方面ではなく、川崎や東京方面に広がり、品川の手前で止まっています。

実はこの広がり方も、元締の持つ領域に関係があるのです。市場神楽の領域の東、品川方面は、同じ神代神楽の間宮社中の領域でし

た。横浜方面は、市場神楽と姻戚関係もあった子安神楽の領域でした。このように、それぞれの元締が持つ領域はきちんと線引きされ、互いに踏み込まないものだったといえます。しかしそれは、元締たち同士が関わりをもたないということではありません。先述のおとよの例のように、元締たちは自分たちの領域を持ちながらも、互いにネットワークでつながり、協力しあって神楽を奉納してきたのです。

四、おわりに

以上、雑駁ですが、市場神楽の奉納の記録と範囲についてみてきました。今回は文政二年の事例だけでしたが、それ以外の年の「御神用控帳」も検討していけば、神楽奉納の実態がさらに明らかになるでしょう。また、図でみた市場神楽の領域は、近世の橋本郡、都筑郡、荏原郡の三郡にわたって広域に展開されています。この地域的まとまりが、神楽奉納を通じた独自のものなのか、ほかの地域的まとまりに規定されたものなのか、考えていく必要もありますが、これらの検討はまたの機会を待ちたいと思います。

市場神楽は現在でも、横浜のみならず、川崎市や東京都で広く奉納されています。近世の領域が現在でも残っていると思うと、遠い昔の近世が近くに感じられるのではないのでしょうか。

【主な参考文献】

- 笹原亮二「神楽師の芸能」(一)(二)(民俗)第二八号、一九八七
鶴見歴史の会「鶴見区伝説芸能発掘調査報告書」(一九八七)
照本都三「里かくし」(一九六八)
永田衛吉「神奈川県民俗芸能誌 続編」(一九六七)
萩原貞雄「市場神代里神楽 その一」(郷土つるみ)第五九号、二〇〇四

複製資料・

「諸岡五十戸」木簡

博物館が収集・保存している資料は、実物の資料だけではありません。(1) 横浜地域の歴史を考えるための資料でありながら、実物資料の入手が不可能な資料、(2) 実物資料の入手が可能な資料であっても、展示や公開、貸出などのために複製を作成しておいた方がよいと考えられる資料、これらの資料については、精巧な複製資料を作成して収集・蓄積を行っています。特に前者の資料については、(a) 横浜地域・武蔵国に属する木簡、墨書土器、漆紙文書などの古代の出土文字資料、(b) 中世の横浜地域に属する資料のうち、地域外に所蔵されている資料、この二つの資料群の複製を優先的に製作しています。

石神遺跡から出土した木簡群の一つです。年月は記されていませんが、他の遺物との関係から七世紀後半のものと考えられます。大きさは、長さ一二六、幅二一、厚さ三ミリメートルで、短冊の形をしています。下の部分はヒビが入って割れていますが、全体の形は本来のままです。表面には「諸岡五十戸」と記され、裏面には文字がありません。木簡はこれだけで完結しています。

ここにみえる「諸岡五十戸」は、後の久良郡の師岡里(郷)〈横浜市港北区諸岡町を中心とした鶴見区西部地域〉にあたります。現時点では、横浜地域の具体的な地名がみえる最古の資料です。大宝元年(七〇二)に施行された大宝令による古代国家の地方行政システムは国・郡・里制で、里は五〇戸から成り立っていました。この里が使用される前の形態が「五十戸」なのです。里は天武一〇年(六八二)〜一二二年に採用され、六八九年に施行された飛鳥浄御原令で確定します。里の採用以後とみられこの木簡は、「五十戸」という表記にこだわっていたこととなります。久良郡の地域には、六世紀以降、ヤマト王権の地域支配のセンターである「倉庫屯倉(久良屯倉)」が置かれました(『日本書紀』安閑天皇元年閏十二月是月条。「五十戸」へのこだわりは、あるいは、この屯倉の支配の系譜に関連するものかもしれません。

「五十戸」の下には文字が三字続きますが、明確には読み切れません。これを「田波羅」(「たはら」)とみ、物品の貢納にかかわる木簡とみる考えもあります。しかし、文字の読み問題があり、物品に紐で括りつけるための切り欠きもなく、物品に付けた木簡とは即断できません。文字の解説もふくめ、木簡の機能の解明はまだまだ課題として残っています。

同じような木簡が今後出土する可能性はありますが、現時点で、この小さな木簡は古代の横浜地域に直結する貴重な木簡であり、七世紀後半代の地域の様相を考える基礎資料なのです。



(平野 卓治)

常設展示室探検

中世の将棋駒

中世展示室の「人々のくらしと生活用具」には、福井県一乗谷の朝倉遺跡から出土した、永禄年間(一五五八〜七〇)の将棋駒の複製が展示してあります。

将棋は象戯とも書き、古代ギリシアもしくはエジプト・インドなどに起源を持つとされる遊技です。日本へ伝わった時期は定かではありませんが、平安時代末の書物『新猿蓑記』のなかには、主人公の娘の想い人の特徴を「囲碁・双六・将棋」の名人と述べており、ここから将棋が古くから人々に愛好されていたと考えられます。その当時の将棋の種類には大將棋・中将棋・小將棋などがあり、駒数も三六〇枚から三六枚のものまでさまざまでした。



展示される将棋駒を眺めると、現在の駒数四〇枚より二つ多い四二枚の駒が並んでいます。この二つは「酔象」と呼ばれる駒で、王将が取られた後にその代わりをして競技を続けるルールだったと推測されています。中世の人々は、現在よりも複雑な将棋を楽しんでいたようです。

【参考文献】増川宏一『将棋―ものゝ人間の文化史、法政大学出版局(一九七七)』

おかげさまで10周年 これからよろしく。

「博物館まつり」報告

一月二九日、三〇日、開館一〇周年記念「博物館まつり」を開催しました。日ごろの感謝の気持ちを込めて、二日間は一入館無料とし、さまざまなイベントを行いました。寒い季節でお客様がいらしていただけるか心配しましたが、二日間で合計二五〇〇人以上の方が来館され、博物館内は子どもたちの声が満ち、外の寒さとは対照的に熱気にあふれました。

常設展示室では、「きいてみよう横浜の歴史 学芸員がおたえします」を開催しました。質問コーナー、仏像パズル、土器にさわるコーナー、赤外線カメラで木簡に書かれた文字を読むコーナーが、展示室中央のスタディーサロンに登場しました。また、六つの通史展示室を各二〇分で解説するガイドツアーも行われました。普段は静

かな雰囲気の中、学芸員の解説の声や、お客様の質問や意見、歓声が聞こえ、活気に包まれました。

「つくってみよう」がたま・縄文ポシエット」を研修室で開催しました。子どもたちに人気の体験学習ですが、「博物館まつり」でも、多くの子どもたち、そして普段は参加できない大人の方たちも参加され、大変にぎわいました。

エントランスホールでは、四畳半の茶室、緋毛氈の縁台をしたらえ、都筑民家園茶道クラブの協力で、お茶会を行いました。にぎやかな催しの合間にホッとした時を感じてもらえたのではないかと思います。

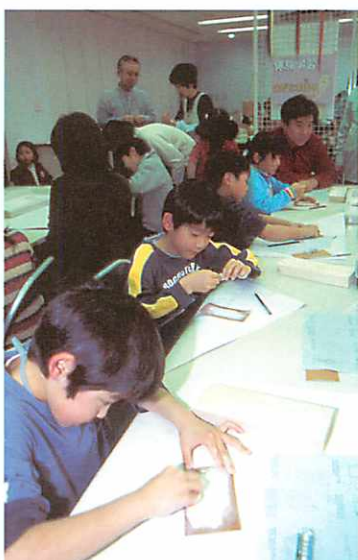
また、昨年十一月に、都筑区内の小学生



に、博物館をテーマにした絵を描いていた、各学校から選ばれた絵を展示しました。三〇日には、歴史博物館賞、都筑区長賞など一六の賞の表彰を行いました。

ミュージアムショップでは、空くじなしの抽選会で当選の鐘が鳴り響き、展示図録の最大五〇%の割引に人だかりができました。その他、今まで開催した企画展・特別展のポスターを一堂に貼りだし、人気投票を行い、講堂では、ビデオ「横浜市歴史博物館建設の歴史」などを上映しました。

終日、来館者でにぎわい、ご家族で一日



を過ごされた方々も多かったようです。一〇年の感謝のための「博物館まつり」に、このように多くの方においでいただき、さらに感謝の念でいっぱいです。今後も、横浜の歴史をみなさんにわかりやすく親しんでいただけるよう、魅力ある事業を実施していきたいと思っています。

ちょいと

ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time

新商品 紹介 オリジナル トートバッグ



オリジナルトートバッグ 840円(税込)

開館一〇周年博物館まつり「ショップフェア」にはたくさんのお客様に来ていただきました。抽選会に、図録の割引大放しと、楽しんでいただけたでしょうか。店内もバーゲンセール会場の賑わいで、スタッフ一同、大感激の二日間でした。ご来店いただいた皆さま、本当にありがとうございました。

「たくさん図録を買ってもらった方に使っていただく。」と思って作ったのが、このトートバッグです。ナイロン製で軽くて丈夫。内側にはファスナー付のポケットがひとつ付いており、ショルダーになっているので、ご見学の際にも両手が使えて便利です。

外側のポケットには、当館の収蔵品である縄文土器の紋様をモザイク状にプリントしてみました。博物館のネームも入っています。目指したのは「年齢性別を問わず、どんな服装でも持ちやすいデザイン！」なのですが、いかがでしょうか？

今後の企画展のお知らせ

- ◎企画展「幕末動乱を生きた武士—武州金沢藩士・萩原唯右衛門則嘉の生涯—」4月9日(土)~5月15日(日)
- ◎収蔵資料展「浮世絵・絵図でめぐるかながわの名所」5月28日(土)~7月3日(日)
- ◎企画展「教科書に載っていない横浜の縄文時代」(仮題)7月16日(土)~9月4日(日)
- ◎テーマ展示「武具と刀剣」(仮題)9月17日(土)~10月10日(日)
- ◎開館10周年記念特別展「横浜うらしま草子」(仮題)10月22日(土)~11月27日(日)

??????? 知ってますか ???????

愛称決定! 「歴博通り」

博物館と大塚・歳勝土遺跡公園の間に走る道路「佐江戸北山田線」の愛称が「歴博通り」となりました!

都筑区誕生10周年を記念して、区役所で、都筑区内を走る幹線道路の愛称募集がありました。「佐江戸北山田線」への愛称も数百通にもものぼるご応募があり、その中から、「歴博通り」が選考されました。

写真1のように「歴博通り」に架かる歩道橋には、その愛称が記されています。これは、都筑区内の小学校児童によって書かれたものです。よく見ると、中には写真2のように文字がユニークな図柄になっています。

写真1のように「歴博通り」に架かる歩道橋には、その愛称が記されています。これは、都筑区内の小学校児童によって書かれたものです。よく見ると、中には写真2のように文字がユニークな図柄になっています。

お車でご来館の際も「歴博通り」を目印にお越しください。

お待ちしております!



写真1



写真2

横浜市歴史博物館 ● 日誌

- (2004年10月1日~2005年3月31日)
- 10月1日 古文書解説教室(12月3日まで連続10回)
 - 10月9日 特別展「ヤマトとアズマー 武具からみるヤマト王権と東国」開催(11月28日まで)
 - 10月11日・11月13日 特別展関連体験学習「古墳時代のよるいを作ろう」
 - 10月16・17日 体験学習「土偶づくり」
 - 10月24日 特別展関連講演とディスカッション 鈴木靖民・古谷毅「武具から探る 5世紀のヤマト王権と東国」
 - 11月11日 ふるさと横浜探検「国宝稲荷山鉄剣と埼玉の古墳群を訪ねて」
 - 11月20日 体験学習「風車づくり」
 - 11月21日 特別展関連講演会 田中晋作「出土した甲冑からみるヤマト王権の軍事組織」、体験学習「ぞうり編み」
 - 12月11日 「平成16年度横浜市指定・登録文化財展」「横浜の遺跡展」開催(1月16日まで)
 - 12月11・12日 体験学習「風車づくり」
 - 12月19日 エントランスホールコンサート「プラスの響き」
 - 12月25日~26日 全館燐蒸のため臨時休館
 - 1月9日 「横浜の遺跡展」研究講座 石井寛「高山遺跡と勝坂式土器の世界」
 - 1月19日 古代史講義講座(2月16日まで連続5回)
 - 1月26日 防災訓練
 - 1月29・30日 開館10周年記念「博物館まつり」
 - 1月30日 開館10周年記念講演会 竹内誠「今に生きる江戸の生活文化」
 - 2月5日 企画展「米づくりの道具たち一犁と唐箕と横浜の農具」開催(3月13日まで)
 - 2月6日 土器作り教室(3月20日まで連続4回)
 - 2月19日 企画展関連講演会「民具の聲から関東の古代を探る」
 - 3月20日 野焼き
 - 3月24日 ふるさと横浜探検「国史跡三島市山中城跡と三嶋大社を訪ねて」

読者プレゼント

いつも博物館ニュースをお読みいただきありがとうございます。感想等をお寄せ下さい。ご応募いただいた方の中から抽選で10の方に、博物館ミュージアムショップよりオリジナルグッズをさしあげます。

はがきに、①お名前、②ご住所、③年齢、④このニュースを手にした場所、⑤ニュースについての感想・要望をお書きのうえ、博物館ニュースプレゼント係までお送り下さい(博物館の住所はこのページの右下)。締切は、2005年5月30日です。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。



横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)

大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

歴史博物館・大塚遺跡
月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

都筑民家園

毎月第3月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区分	個人	団体 (20人以上1人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。

◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。

◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
〔「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分〕



駐車場あり(2時間400円)

●インターネットホームページ

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

編集後記

おかげさまで一〇周年を迎え、博物館ニュースも二〇号をお届けすることができました。一月二九・三〇日の「博物館まつり」当日には、お越しいただいた多くの方々に、博物館ニュース一〇周年記念号をお配りしました。初めての二四頁の特別版です(まだ在庫あります)。今後もみなさまに喜んでいただけるような紙面づくりをしていきたいと思っています。よろしくお願いたします。

